

## 断章 (III)

山中哲夫

Tetsuo YAMANAKA

外国語教育講座

### LXI

恋愛感情において、わたしたちが美しいと感じるとき、それは一体何が美しいのだろうか。ラシーヌにあっては嫉妬さえも美しい。むろん醜い嫉妬もあるが、そして現実にはその方が多いのだが、しかし作品中の嫉妬は“嫉妬”という特別の美しさをもつように思われる。美化というようなことではない。生（なま）の感情が作品化されることで、一種の結晶化作用を蒙るのだろうか。この *crystallisation* はどんな写実的な作品にあっても存在する。それが真に「作品」であるかぎり。

### LXII

ロマネスク——これが人間の感情を美しく感じさせるもののように思える。ロマネスクな（つまり在り得べからざる）物語には、体験と未体験との接点がある。まずロマネスクなものへの序曲として、誰でも体験する事実があり、かくあるように物語は進んでゆく。不自然なもの、非現実的なものはどこにもない。しかし、どこにも不自然なものがない筋の運びが、いつの間にか読者を“在り得べからざる”状況へと導いている。明確にそれと気づくまで、なぜこんなところまできたのか、読者にはまったく分からない。幻想的であろうと、写実的であろうと、その文学のスタイルは問わない。表現方法はどうでもよいのだ。現実を追っていながら、気づかぬうちに存在し得ない空間、存在し得ない心理状態に読者が迷い込んでいるということが問題なのだ。それこそ——ロマネスクと人が呼んでいるものに他ならない。

### LXIII

ロマネスクについて、再び。ロマネスクとは荒唐無稽な話でもなければ、資料や写真の寄せ集めでもない。それは現実でありながら夢であり、仮象のものでありながら実質の力をもち、読者の多くが納得し、しかも究極的には不可知の世界である。葉子も駒子も太田夫人も、すべてまぼろしなのだ。あれはまぼろしの美しさなのだ。見事に描き出されているために人は気づかないが、あれは「作品」の中に棲むかげろうなのだ。

### LXIV

1852年12月28日付けフローベールの書簡にこういう箇所があった。この気分はじつによく分かる——《いま外では恐ろしい風が吹き荒れ、木々や川が唸りを上げています。今夜は、太陽に照らされた草むらの、羽虫が舞う夏のある場面を書いています。対照的な環境にあればあるほど、その対極にある情景がはっきりとよく見えます。この激しく吹き荒れる風が、一晩中わたしを魅惑しつづけました。わたしは揺籠のように揺すられ、陶然となりました。》一方、プルーストはこう書く——《冬の部屋。凍りつくような天候の中で、人が味う楽しみとは、(大地の温かさに包まれた地下の奥深くに巣をもつアジサシのように) 自分が外部から隔離していると感じるときの楽しみである。一晩中暖炉の火は燃やされつづけ、煙を帯びた温かい空気のマントにくるまれて眠る。この空気のマントに、一種の触れられないアルコールともいべき暖炉の、再び熾された燐火の明かりがほのかにしみとおる。この暖炉、あるいは寝室の真ん中に穿たれた熱い洞窟(……)》(『ジャン・サントウイユ』) 畢竟、フローベールもプルーストも同じひとつのことしか言っていないように思われる。それは、冬というもののもたらす独特の感覚と想像力である。

### LXV

ラファディオ・ハーンはその著書『心』の中で、恋愛感情の因果応報について述べている。過去において成就しなかった祖先の愛が、《幾代もの人の心のなかに生々流転して》子孫の恋愛感情の中に生きつづけ、過去の女性(あるいは男性)を追慕し、《自分の愛した形骸の再現を待っている》のではないかと彼は考える。個々人の記憶の中には、幾兆幾京とも知れぬ祖先たちの経験が無意識裡に含まれていて、とりわけそれは初恋の不可思議さによく表われている、と。このことは、精神分析では(ナルシシズムと部分対象という語によって)一刀両断の下に切って捨てられるのだが、明治のロマン主義者にして西洋人の中の東洋人であったハーンにかかれば、たちまちにして神秘的・霊的世界の話へと変わる。ある人の恋愛感情が、不滅の靈魂のように、何代も何代も数知れぬ血をくぐり抜けて、思

いを叶えるために永遠に流転してゆく——いまでもダ  
ンテに似た男がベアトリーチェに似た女を追い求めて  
いる、と考えるほうが、確かに恋愛の神秘性を納めさ  
せるのに効力があるように思われる。

## LXVI

《目をつぶって、その（サクランボの種の）頭上に  
金槌を振り下ろす。当たったものは運が悪かった。  
（……）そのうちでも彼の最大の楽しみは、紙でこし  
らえた町に火をつけることだった。火をつけて、それ  
から灰燼と化した塊を悲しみの混じった厳粛な思いで  
じっとみつめることだった。》（カール・フィリップ・  
マリッツ）サクランボの種を一行に並べて軍隊のよう  
に動かす自分自身は、さながら大隊長であり、そのサ  
クランボの兵隊に鉄槌を振り下ろして粉々にする自分  
自身は、また強大な敵兵か、あるいは空想の怪物であ  
る——といった他愛ない遊びには、しかしながら、計  
り知れぬ孤独感が漂う。これは外部世界との激しい軋  
轢から生じた遊びである。謂わば歪んだ独楽。

## LXVII

再びマリッツの小説について。紙で作った家やビル  
を燃やすときの歓びは、官能的で背徳的ですからある。  
アルペール・ベガンはマリッツの現実の「生」と夢の  
「生」との、あるいは現存在と非在との亀裂から生じ  
た自己の無個性化のひとつの例として、このような小  
説の一節を引用したわけだが（『ロマン的魂と夢』）、確  
かに現代においても、こういう種類の一人遊びには、  
どこか没個性的、没自我的なところがある。おそろしく  
个性的で主体的でありながら、そのじつ、きわめて  
没個性的、没自我的な遊び——この一人遊びには病的  
なものが潜んでいる気がしてならない。

## LXVIII

マリッツの一人遊びについて、三たび。現実のもの  
をかたどったミニチュアールを燃やすという行為に  
は、復讐にも似た快楽があるように思われる。現実と  
夢の混淆。現実の世界で空想を形作り、その架空の空  
想を現実のものに見做し、その空想の現実（サクラン  
ボの兵隊にしる、紙の家にしる）を壊すというまわり  
くどいやり方で現実<sup>に</sup>たいして復讐しているのではあ  
るまいか。つまり現実<sup>に</sup>（空想上ではなく）壊すこと  
で、その空想の現実<sup>は</sup>よけいに生々しいリアリティをも  
つ。それが奇怪な快楽を感じさせる。マリッツの小  
説の一節は、わたしに川端康成の小説の一節を思い起  
こさせた——《西洋人の幼い子は、近所の別荘がすっか  
り<sup>ひとけ</sup>人気のなくなった林のなかに、孤独で遊ぶことが出  
来る。軽井沢で須田が一番感心したことだった。》（『高  
原』）

## LXIX

1870年のヴィクトル・ユゴーの日記の一部にこうい  
うのがある——《7月16日午後6時。宣戦布告。フラン  
スとプロシアの間で戦争が始まった。宗教会議におい  
て教皇の無謬性が宣言される。7月17日。三日前、つ  
まりわたしがオートヴィル＝ウーズの自宅の庭に柏の  
木を植えていた7月14日の同じ頃、ヨーロッパでは戦  
争が勃発し、ローマでは教皇の無謬性が宣言された。  
百年後、もはや戦争は起きず、教皇も存在せず、柏の  
木だけが大きくなっていることだろう。》百三十年後の  
今日、ユゴーが植えた柏の木はどれほど大きくなって  
いることだろう。相次ぐ戦乱で根こそぎ引き抜かれて  
いるか。あるいは燃えて灰燼と化しているか。もし、  
いまなお青々とした葉を風にそよがせて立っているの  
なら、その姿をぜひ見たいものである。その姿はおそ  
らくユゴーの図太い精神の象徴のように目に映ること  
だろう。また自然にたいする彼の信頼の証しとも感じ  
られるかもしれない。ともかく、このように泰然とし  
て日記の書けるユゴーの態度はじつに羨ましいかぎり  
だ。

## LXX

フローベール『ボヴァリー夫人』を読む。よくもこ  
んなくだらな人物ばかり描いたものだ。書きながら  
うんざりしているフローベールの顔を想像する。ロド  
ルフとの逢引のあたりから筆致が変わってきたように思  
われる。ピッチが早くなり、くぐくぐと説明や描写  
が減って、人物の行動と心理とが中心になってきた。  
そろそろ筋としても先を急がねばならぬあたりだ。農  
業品評会での市長やお偉方のまじめくさった、それで  
いて滑稽この上ない演説の合間合間に交わされる、二  
人のきわどい会話は、なるほどうまいと思った。彼の  
文章というより彼の文体のいたるところに、無人格、  
無個性、無味無臭のフローベールという作家を直接肌  
に感じ、鳥肌が立った。

## LXXI

「心の平安を得る」——フランス語では“se reconcil  
lier avec soi-même”という。（リトレ辞典）直訳する  
と「自分自身と折り合う」という意味になる。いかにも  
主知主義の国らしい分析的な表現だ。心に苦悩をも  
つとは、したがって自分自身と喧嘩している状態とい  
うことになろう。他者との軋轢は、他者を介してのも  
う一人の自分との葛藤ということか。親との葛藤、子  
供との葛藤、配偶者との葛藤は、そういった他者の顔  
をした別の自分との葛藤ということか。自分自身と折  
り合わない者は、他者とも折り合えないし、最悪の場  
合は分裂的になってゆく。人を変えるためには、まず  
自分自身を変えよ、とよく言われるが、結局このよう

一人の自分とうまく折り合いをつけよ、ということに他なるまい。もう一人の自分と仲直りできれば、自然に他者とも仲直りができる。自分を許し人を許すことができるようになる。親も子供も配偶者も。

## LXXII

「神に宥しを乞う」——フランス語では“se reconcilier avec Dieu”という。(同辞典)直訳すると「神と折り合う」という意味になる。神に宥しを乞うとは、神と仲直りするということである。人間は生まれながらにして原罪を負っている。原罪を負ったときから、神との仲違いがはじまった。こちらから頭を下げて「悪かった、私が間違っていた」と改悔することが、神から宥しを得ることであり、救いを受けることである。神は人間との和解の手を握ることを待っている。しかしこれはあくまでカトリシズムの立場に立った解釈である。原罪は、はじめからないに越したことはない。

## LXXIII

《同じ年頃の女性に失望した若い男性は、ときとして四十代の女性に惹かれることがある。そういった女性は彼に優しくしてくれる。なぜなら、その愛の中にはいく分かの母性愛が含まれているからであるし、年上で、やがて老いてゆく運命にあることを知っている彼女は、若い男性をつなぎとめるために、懸命な努力をするからだ。しかし、このような結びつきでは、やがて心のバランスを維持するのが困難になってくる。ほぼ同じ世代に属し、男性の方が少し年上で、ともに誠実さと、貞節の意思と、相互理解の誓いをもって、ともに愛を受け入れ合う、そのような二人の無条件の結びつき以上に、幸福という点で価値あるものはないのだ。》(アンドレ・モーロワ『未知の女性への手紙』)しかしモーロワの言葉どおりにはいかない。個々の恋愛や結婚の有様は千差万別で、現実には言葉ほど美しいものではない。それほど数行で割り切れるものではない。

## LXXIV

ミシュレ『タブロー・ド・パリ』——見事な文章。珠玉の名文。地理と歴史の美しい結合。これほど直截に、これほど無条件に、これほど素直に、これほどこだわりなく、全身全霊で自分の生まれた国土を愛することができる者は幸せである。十九世紀のガスコーニュ、ラングドック、オーヴェルニュ、プロヴァンス……。植物誌と古譚の類い稀なる融合。伝統と舞踊のアマルガム。

## LXXV

ラ・ロシュフーコーの箴言の一つ——《本当の優しさをもつことのできる人は、しっかりした心構えの持ち主だけだ。一見優しそうに見える人は、たいてい弱さ

だけしかもっていない人だ。そしてその弱さは、簡単に気難しさになり変る。》真の優しさは強さをその内に秘めており、見かけの優しさは弱さをその内に隠し持っている。強さに裏打ちされた優しさは、どこまで行っても優しさのままだが、弱さゆえの優しさは、すぐに気難しさ、不機嫌へと移行する。青年の優しさがこれである。これは哲学的に言えば、己れ自身の自我の問題が、心理学的に言えば、母親にたいする去勢コンプレックスが解消されていないためである。この問題が解消されてはじめて、男性は大人になる。強さに裏打ちされた真の優しさをもつことができる。しかし、西欧人に比べ、日本人はなかなかここに到らない。したがって、日本人は西欧人に比べ、まだ子供である。

## LXXVI

佐藤春夫『田園の憂鬱』——文体と内容の幸福なる一致。前半と後半で不統一に苦しむ文体そのものが、いかにも内容の危うさにふさわしい。佐藤春夫が書いたには違いないが、またそれは、彼の青春が彼に書かせたものでもあったろう。小林秀雄は“青春の書”だと言ったが、まったくその通りだ。少し勢い込んだ、けれども瑞々しきの溢れるこの作品を読んでいると、「処女作」というものの不思議な魅力について考えさせられた。梶井の『檸檬』、原口の『二十歳のエチュード』を連想した。内容も、文体も、時代も、個性も各人各様だが、この不思議な魅力は共通している。

## LXXVII

誰でも青春の一時期には自分の『田園の憂鬱』を書くのだろう。神経を漲らせ、意識的で、そのじつ、かなり無意識的な弾みにつき動かされ、求心的でありながら拡散的で、至上の存在を信じ、自らも至上のものたらんと努め、自己を表現せずとも自ら自己表現となり、マイクロメガ的に微小なものが膨脹し、見えないものが見え、聞えないものが聞え、したがって容易に周囲に伝説ができ、現実との見境もつかなくなり、不安で、なにかしら不安で、肉体の寂しさをかき抱き、ため息のように観念を吐き漏らし、懶惰な審美の眠りを眠る、誰にでもあるそういう青春の一時期、皆それぞれの『田園の憂鬱』を書き、あるいは書こうとするのだろう。そして、佐藤春夫のものは、そのもっとも典型的で、もっとも成功した稀有の例であろう。

## LXXVIII

水は人を死に誘う。玉川上水に身を投げて死んだ太宰の情死を報じる新聞記事を読んで、神西清夫人は「なぜ太宰さんの家は雨もりがするんでしょう」と訝った。洗面器に落ちる水音で、太宰はよけいに死にたくなつたのではないだろうか。あの日、雨が降っていなかったなら、少なくともその日は彼は死ななかつたように

思う。水は人を死に誘う。アルコール中毒者は水を恐れる。晩年のボードレーはベルギー講演の旅先で、テーブルの上の水の入ったコップさえ片付けさせたという。ヴェネツィアの夜に枕辺に聞く、ひたひたと忍び寄る水音ほど、不気味でしかも郷愁を誘うものはない。それは死の不気味さであり、死への郷愁である。

### LXXIX

《現代の学生の心は非常に不安であり、性格が分裂し、懐疑的であり云々の事がよく言われるが、僕は自分がまさしくそういう学生であったから、別にそういう事を深く感じないのである。僕の学生時代から見ると、今日の時代の方が、確信を抱いて生き難い時代になっているという事は、まさにそうだろうと思うが、どんな時代に仕立て人間としての真の確信というものを掴めるのは、生まやさしい仕事ではないし、ほんと言えは青年などの手に合う仕事ではない。時代の反映であろうが、生理的反映であろうが、精神の不安は青年の特権である、という考えを僕は自分の青年時代の経験から信じている。》(小林秀雄『文科の学生諸君へ』)この文章が書かれたのは戦前である。最近の言葉といっても通用する、見事な文章である。小林はまたこうも言っている——《人間は自分の姿というものが漸次よく見えて来るにつれて、自己をあまり語らない様になって来る。》これは小林自身のことを言ったものだろう。

### LXXX

石川啄木『ロオマ字日記』——誰も彼を咎めまい。誰も彼に同情すまい。非難も憐憫も啄木とは関係のないものだ。啄木とはなんと厭な奴だ、その通り。啄木とはなんと救われぬ奴だ、その通り。啄木とはなんと哀しい奴だ、その通り。啄木とはなんといい気な奴だ、その通り。啄木とはなんと恐ろしい奴だ、その通り。けれども畢竟、それは才能をもって生まれた人間の、さまざまな形で外に現われた生き難い「生」の一面にすぎない。仮面も素顔もその一面にすぎない。自らの才能だけで生きようとするほど愚かで困難なものはない。これほどの悲劇はない。けれども、才能しかない者はそれで生きる以外にどんな生き方があるというのだろうか。才能だけがあるというのはなんとという不幸だろう。

### LXXXI

廣津和郎。この虚偽を嫌う態度は志賀直哉と同じくらいに執拗だが、さらにもっと不安な懐疑に根ざしている。嘘を嫌い、また自身嘘を書かなかったのは、あるいは大正末期における文学者一般の態度であったかもしれないが、ともかく、そういう潔癖な身の処し方は、いつしか強迫観念を生み出し、もはや身の処し方

にすらならなくなり、次第に書けなくなって、ついには衰弱してゆくことになる。当然といえば当然のことだろう。しかし、そのことが無意味だということではない。むしろ無意味は、そういう動きを「新現実主義」(あるいは「後期自然主義」と総称することだ。作家個人の心の變は、そのような呼称でとらえ切れるものではない。

### LXXXII

葛西善藏の異様な暗さには、どこかフィクションめいたものが感じられる。それよりも、ときおり見せる巧まざるユーモアのほうこそ、彼の生来のものであり、彼のもっとも良質な部分であると思われる。

### LXXXIII

マチスの言葉——《セザンヌの絵は特殊な構造で、反対にしてみると、たとえば鏡に写すと、セザンヌの絵はよく均衡を失う。》本当かどうか、試しにスライドを裏返しにして映してみる。とたんに、トランプ遊びをする人々は、たてつけの悪い扉か、脚の不揃いなテーブルのように、不安定でガタビシした印象をあたえる絵に変わる、これでは彼らも着落いてトランプ遊びに興じられまい。静物画も同じように裏返しに映してみる。リングはいまにもテーブルからこぼれ落ちそうに見える。水差しはひとりでにひっくり返りそうに見える。構図というものがいかにデリケートで、絵を左右するほど大切なものであるかを、セザンヌは教えてくれる。

### LXXXIV

リルケの詩に浸されていると、死さえも恐ろしくなくなる。むしろ死にきわめて近いところで、彼の詩が美しく呼吸しているように思える。この未曾有の静けさは、そのためだろう。中国風の顔をした色黒のこの宦官は、白亜紀のヨーロッパの貝殻に、どこにもない愛の驕慢なさざ波を聞いている。

### LXXXV

リルケ。地獄の夜から甦ったマルテは、イジチュールの夜を経たマラルメの目をもっている。すなわち、「非人称」という不気味な目を、その目に映るものはことごとく「世界内面空間」という鳥宇宙に取り込まれる。

### LXXXVI

リヴィエール＝クローデル往復書簡集。この書簡集には二つの山がある。一つは、往復書簡開始当初の、リヴィエールの切羽詰まった自我の病の訴え。もう一つは、後半での、やはりリヴィエールの作家になる決心の表明と、糊口についての不安。教職に就くより批評家として雑誌に評論を発表することのほうがより自

分に忠実な道だ、とリヴィエールはいかにも良心の作家らしくクローデルに告白する。この二つの大きな問題にたいするクローデルの態度は、いつもながち落ち着き払っている。まるで自身、リヴィエールとまったく同じことを体験してきたかのような落ち着きぶりだ。ゆっくりと、慎重に、相手の訴えに耳を傾け、ことの重要さをよく吟味し、ことの是非を判断し、最良の方法と思われるものをそれとなく示唆する。クローデルはあくまで自己に忠実に、しかも相手の道にも忠実であろうとして、考え考え、しかし断言すべきところははっきりと断言し、短い言葉で助言をあたえるのである。相手が己れの人生に嘘をつかないように、ということにもっとも気を配りつつ。

## LXXXVII

ジャック・リヴィエールのカトリシズムの揺らぎ。彼は自分の信仰にたいする疑いを、当時中国にいたクローデルにぶつける。クローデルの返答はいかにもカトリック詩人らしくストイックなものである。その一節——《青春は楽しむためにある、という人たちの言葉を信じてはいけない。青春は快樂のために造られたものではありません。青春はヒロイズムのために造られているのです。自分を取り巻く誘惑に抗い、馬鹿にされた教義をただ一人信じ、書物や雑誌や新聞に満ち溢れる嘲笑や非難に怯むことなく真正面から対峙し、家族や友人たちと対立し、ただ一人孤立しながら、ただ一人信仰を持ちつづけるためには、青年にはヒロイズムが本当に必要なのです。》(1907年3月3日、天津)これは真の意味での信仰ではないかもしれないが、少なくともそこに到るための道標ではある。ここでクロー

デルが言っているヒロイズムとは、主義主張のことでなく、精神の在り方のことである。青年が青年らしく生きるための護符であり、また階章である。

## LXXXVIII

クローデルの大きな常識。あるいは一つの至言。曰く、《高慢は力の証しではなく、弱さの証しです。神父たちはそれを“精神的な淫蕩”と呼んでいます。》

## LXXXIX

神学の教義問答めいた中間部は、門外漢のわたしには少々退屈だったが、クローデルは相手の手紙の調子がどうあれ自分を失うことはない。いつも同じトーンで答えている。それだけになお一層、あるときは息せき切って性急に、もどかしげに早口に喋り、またあるときはおずおずと、相手の顔色を窺いながら遠慮がちに喋る、若きリヴィエールの手紙のほうが、なまなましく読む者を惹きつける。しかしこの謂わば「対話劇」が“劇的”であるのは、そういうリヴィエールの変化に富んだ、陰影の濃いデクラマシヨンのゆえではなく、受け手のクローデルの不動の返答のゆえである。

## XC

往復書簡集の最後から二番目のクローデルの残酷な明言——《付け加えておくと、作家にとって恋愛ほど悪しき誘惑はありません。というのも、この道にはまり込むと、愚か者にならないまでも、作家として決して成功しないことが絶対的に確かだからです。》

(平成13年8月23日受理)